
ツンデレ = 感情表現が不器用な人？

闇夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツンデレII感情表現が不器用な人？

【Nコード】

N4122C

【作者名】

闇夜

【あらすじ】

ある有名な高校に入った直人。彼に付きまとう幼馴染の瑠衣。感情表現が苦手な彼女。恋愛とは何なんでしょうか？

桜の咲きそろう頃、俺は何の苦勞もせずに名門校に通学することになった。

苦勞しなくても、勉強がすんなり入ってくるし、運動神経もいい、そこらへんの男よりもカッコいい。そんな俺にも誤差が会った。

その誤差こそが、俺の目の前に座っている女、星野瑠衣ほしのるい。小、中と一緒に家は俺のまん前にある。子供のころは良く遊んだが、中学になるとお互い距離を置き、めったに会わなかった。しかし、高校になり席が前にあるという地の利を生かし、ゴールデンウィークのあけた直後、ヤツは本領を発揮し始めた。

瑠衣が付きまとい始めたからというもの俺にはいいことが起きなかったのだろう。

え、確か今は三時間目、教科は数学。

簡単な計算問題だけで、俺が退屈して欠伸をしていると、いきなり俺の視界が瑠衣の顔に占拠された。

俺は慌てて後ろに仰け反る。そして遠くから瑠璃であることを確認する。

真っ黒な瞳に、桃のようなピンク色の唇、長い髪を綺麗に整えてヘアピンなどで頭を飾っている。外見としては普通だろう。けど、頭の方は猿さみのはずなのに、なんで俺と一緒に高校にいるんだよ！

「ねえ、直人なほ。授業めんどくさい」

直人ってのは俺のことで、正式名は赤石直人あかいし。以上、説明終わり、終了。自分のことを言うのって嫌いなんだよ。

「おい、そこちゃんと授業聞け！」

担当の教師が指をさし注意をする。

「すいません、ちょっと分からないところがあったので直人に聞いて

ました」

「おっ、あ、そうか」

教師は口ごもり黒板に向かう。

よくこうも平然と嘘をつけるものだ。

そんなこと思っているうちに授業終了のチャイムが鳴り響く。俺がいそいそと教科書を片付けていると、瑠衣がお弁当を持ってたっていた。

「ねえ、直人。私今日屋上でお弁当をたべるの」

「そりゃ〜ご苦労なこつた。光合成でもするのか？この暑い中」

「ばつかじゃないの！早く行くわよ」

瑠衣はあきれたように両手を広げて言う。

「『行くわよ』ってなんだよ。俺は教室で食うから」

「いいから来なさい」

そういつて瑠衣は俺の手首をつかみ、一緒に屋上まで向かった。もちろん弁当持参で。

屋上の扉をあけると、予想以上の炎天下。

建物で、日陰になっている場所を探し、俺たちは腰を下ろす。

「わざわざ、何で屋上なんだろ」

おれは弁当箱を広げて瑠衣にたずねる。

「だって今日は五月七日よ」

「意味が分からん」

「明日は私の誕生日よ！まさか忘れてたの？」

瑠衣は普段の柔らかい顔を崩し、ツリ目で俺を睨む。

「覚えてないといえば嘘になるけど……………」

瑠衣は沈んだ様子だったが、急に目の色を変えた。

「まあ、いいわ信じてるし。あつ、タコさんウインナーもらいつ

そういつて、俺の弁当箱からタコさんウインナーをつまみ出す。

「おいおい、子供じゃないんだから。返せよ」

そういつて、やっぱり子供みたいにじゃれあつた。

その後ももちろん授業があつて、俺は適当にノートだけとつてすべての授業を終わらせた。

放課後になり、俺は少し遅れ帰り支度をしていると、メガネをかけた三つ編みの少女が近づいてきた。

「ねえ、赤石くん。ちよつとさっきの英文わかんなかったんだけど、教えてくれる？」

両手をあわせ懇願する。

それで、俺が名前もよく分からない女に勉強を教えている。すると、掃除当番でまだ学校に残っていた瑠衣が、床を掃きながらチラチラとこつちを睨んでくる。

掃除終了のチャイムがなると、瑠衣は疾風の如く箒を片付け、俺の方に向かつてきた。

来るやいなや、俺の胸倉をつかむ。

「さあゝ直人。帰るわよ」

「今はこの子に勉強を教えてんだよ。ちよつと待ってくれ」

「は、はあゝん。直人はメガネ属性があつたと！」

そういつて瑠衣はメガネの子を品定めするように見る。

「メガネを掛けていない私の言う事は聞けないと！」

「なにいつてんだよ？」

「いいから帰るわよ！今日は一緒に帰らなきゃだめなの」

そういつて俺のバッグをとりあげると、ズカズカと俺をおしながら学校を出た。すまないメガネの人、明日ちゃんと教えるから。とか思いながら。

俺たちの家は学校から歩いて帰れる距離なので、当然歩いてきている。つてか自転車は認められていないんだよ。不便なこつた。

くだらない会話をしながら歩いてみると、瑠衣がある店に寄ろうと言い出した。そこは古くからあるアクセサリーショップだ。俺が小学生のころにできたのやつだ。はじめは人気だったが所詮は田舎に

あるアクセサリーショップ。黒い墓石の中にある白石のようなもの。今じゃほとんど客はいない。

それでも構わずに瑠衣は店に入っていく。

「店長さん、まだあれ残ってる？」

店に入ると同時に瑠衣は大声でそういった。すると奥の方から小さな箱を持った店長らしき男が現れた。

「おっ、瑠衣ちゃんか。まだ残ってるよ」

瑠衣は頻繁にこの店に通っているのか？なぜか店長と仲がよさげだ。店長は、瑠衣に箱を開けて見せる。

そこには十字架のアクセサリーがあり、中央に吸い込まれそうなほど綺麗なガラス細工が施されていた。

これは確か、小学六年のとき瑠衣が気に入ってたものだ。これが残ってるって、この店は大丈夫か？

瑠衣の輝く目を見てから、俺は確認のために聞いてみた。

「これって、お前が気に入ったやつだよな」

「やっぱ覚えてたんじゃん」

そういつて瑠衣は目を輝かせた。

「そりゃ覚えてるさ。小6のときお前ずっと見てたからな」

そういつて二人で笑った。

このとき俺は何も分かっていなかった。それが瑠衣にとってどれほどのものか。忘れていた。

次の日の朝、俺がざわめく教室で勉強していると珍しく瑠衣が遅刻しないで入ってきた。

俺の前の席にバッグをおろすと、こっちに向き直る。

「ねえ、直人。渡したいものがあるならもらってもいいわよ。約束のものあるんでしょ？」

彼女は顔を赤くして、目線を合わせずに言う。

「渡したいものって何だよ？」

俺は少し笑って言う。

「だから、今日は私の誕生日なのよ」

「あつ、そうだったな。帰りになんかおごってやるよ」

「は、バツカじゃないの」

そういつて瑠衣は憤慨する。

「バカバカつて、お前の行動はよく分からないんだよ」

すると瑠衣は黙り、顔をトマトのように真っ赤にして、次第に瞳が潤み始めた。

「直人のバカ、バカ、バカ」

瑠衣はそういつて、流れる涙も拭かずに教室を出て行った。

いったいなんなんだよと思しながらも、さっきの顔を思い出すと胸が痛んだ。俺はしばらくボーとしていると誰かに肩をたたかれた。メガネの子だった。

「赤石くん。私がおんなこと言っているのか分からないけど、彼女あなたのことが好きなんだと思うわ。でも、その表現がうまくできないだけ。さつき『約束のもの』って言ってたじゃない。好きな人に約束を破られるのはとてもつらいことだと思うわ」
そういつてメガネの子は離れていった。

彼女の言葉はグツと胸に突き刺さった。それとともに古い記憶がよみがえってきた。

まだ小6のとき、瑠衣があのアクセサリーに見入って離れないから俺は確か言っただはずだ。

「俺が高校生になったら、お前の誕生日プレゼントに買ってやるから、家に帰ろうぜ」

俺は思い出し、席を立った。そのまま学校を出て、あのアクセサリーショップへ向かった。

アクセサリーショップは相変わらず誰もいなかった。ただ店長がレジにいるだけ。

「すいません、瑠衣が昨日見たたアクセサリーください」

店長は少し訝しげな顔をしてから、アクセサリーを持ってきた。

「え〜と三万円になります。」

財布を確認するが到底そんな金額持ち歩いていない。

「頼みます、お金は絶対明日持つてくるので、それを譲ってくださ
い」

店長は少し迷っていたが一つの質問を投げかけた。

「君はもしかして直人くんかい？」

俺はうなずいた。

「瑠衣ちゃんから話は聞いてるよ。いつも言っていたよ『私の一番
好きな人がこのアクセサリーをくれるんだ』って」

そういつて店長はアクセサリーを俺の手にそっと握らせた。

なんてあいつは不器用なんだよと俺は心の中で叫び、彼女の元へ向
かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4122c/>

ツンデレ = 感情表現が不器用な人？

2010年10月9日03時58分発行